令和７・８年度　第５回「おおた生涯学習推進プラン」推進会議

議事要旨

日時　　令和８年８月 25 日（火）午後２時から午後４時まで

場所　　消費者生活センター　大集会室

出席者　名和田委員（会長）、倉持委員（副会長）、青海委員、石井委員、井上委員、海老澤委員、笈川委員、大島委員、尾上委員、金田委員、栢沼委員、近田委員、近藤委員、嶋村委員、髙橋委員

（役職・50 音順）

１　開会

【事務局】

第５回「おおた生涯学習推進プラン」推進会議を開催する。

会議録の作成のため議事の録音及び写真撮影をさせていただく。

関係所属として、区民協働・多文化共生担当課長、スポーツ推進課長、文化芸術推進課長が出席させていただいている。

また、当該プランの策定支援業務を委託している事業者も参加させていただく。

２　開会（部長挨拶）

【事務局】

それでは開会にあたり、スポーツ・文化芸術担当部長からご挨拶申し上げる。

【スポーツ・文化芸術担当部長】

日頃より、区の社会教育、生涯学習の推進に多大なるご尽力をいただき感謝申し上げる。

前回の会議では、理念について幅広いご意見をいただいた。会長、副会長にお力添えいただき、理念を再考したため、後ほど説明させていただく。

本日の会議では、理念の他に、各目標の目指す姿や取組例、指標について確認

いただきたい。さらに、骨子を基に、文化センターを拠点とした生涯学習の地域展開をテーマにご意見をいただきたいと考えている。活発なご議論をいただくことをお願いし、挨拶とさせていただく。

3　会長挨拶

【会　長】

令和７、８年度と計画策定について議論を重ねてきて、佳境に入っている。今日の特に重要な議題は、文化センターを拠点とした地域展開のため、みなさまにお知恵をいただきたい。

議題に入る前に、会議の公開についてお諮りする。推進会議運営要綱第７条に、「推進会議は、原則として公開とする。ただし、１公開することにより公正かつ中立な審議に著しい支障を及ぼすおそれがあると認められる場合、２特定の者に不当な利益または不利益をもたらすおそれがあると認められる場合、３会議の内容に個人情報が含まれている場合は、会議の全部又は一部を非公開とすることができる」とある。本日の会議の内容には、それらに該当する内容は含まれていないため、会議は公開とする。

4　議題

【会　長】

前回会議で理念について、皆様から多くのご意見をいただいたため、会長と副会長に一任いただくこととなっていた。その結果を発表させていただく。

事務局から説明をお願いする。

【事務局】

資料１に基づき説明

【会　長】

私と副会長、専門職を含めた事務局も知恵を出し、最終的にこのようにまとめさせていただいた。いかがか。

（異議なし）

【会　長】

では、次期プランの理念は、「一人ひとりの学びが響き合い 共に創る おおたの未来」とさせていただく。

【会　長】

続いて、議題（１）「イ　各目標のめざす姿、取組例」について、事務局から説明をお願いする。

【事務局】

資料２に基づいて説明

【会　長】

特に文化センターのあり方という、具体的に行動したり活動したりする、そういう場面を念頭に置きながら議論した方が、中身の面ではおそらく議論しやすいと思う。こちらの議事（１）のところは計画の枠組みやその項目立てが適切であろうかという観点から、ご意見いただくとよい。もしご意見やご質問等あればお願いする。

【委員】

目標１の「学びの裾野を広げる」のめざす姿のところだが、『いつでも どこでも 誰もが学ぶ楽しさに出会えています』の『いつでも どこでも』は入れなくても成り立つのではないかと思った。

また、目標２のめざす姿のところで、「学びを通じて世代を超えたゆるやかなつながりがまちに広がっています」の「ゆるやかな」はなぜ入れたのか。「ゆるやかなつながり」となってしまうと、「強い（強固な）つながりはなくてよいのか」と思ってしまったので、「ゆるやかな」がなくても成立するのではないかと思った。したがって、目標１のめざす姿は「誰もが学ぶ楽しさに出会えています」、目標２は「世代を超えたつながりがまちに広がっています」でよいのではないか。

【事務局】

１つ目は、ご指摘のとおりである。

２つ目の「ゆるやかな」は、私どもの思いがある。色々なところで担い手不足と言われる中で、生涯学習の分野は、つながりが育まれやすい分野だと思っているところである。そういう意味で、あえて心理的負担にならないように「ゆるやかな」と入れている。自分が楽しいと思うことから入ってきてもらい、より強固な地縁団体などと同じぐらいのつながりを生み出すことができればと思っている。

【会　長】

今のご意見を踏まえて、さらに事務局で検討していただきたいと思うが、「いつでもどこでも」というのも、多様なきっかけで学びに至るということを表現したい意図かと思っている。表現が適切であるかはご検討いただきたい。

「ゆるやかな」は、行政の責任逃れと感じる反面、自分でも使っている。私が関わっていた他市でのアンケート調査を通じて、「絶対会員にならなければいけない」、「入ってしまったら抜けられない」などを今の現役世代は警戒していると感じているので、「ゆるやか」という言葉が適切である場面もあるように思う。この箇所で「ゆるやかな」とつけるのが適切であるかどうか、事務局にご検討いただきたい。個人的にはこの点については、使用してもよいように思う。

【委員】

全体の計画の印象であるが、こどもたちや青年、これから活動する人たちが活動の場所を得るということが、まず目標のように思う。例えば文化センターでは、かつて着物の着付けや社交ダンスのサークルがあった。しかし、この 10 年の間にそのようなサークルがなくなり、麻雀サークルが多くなった。しかし、若いグループや中学生の合唱、吹奏楽は完成度が高い。その人たちが発表や活動ができる場所として、防音設備やホールが必要である。また、施設側が温かく迎えてくれることも必要である。さらに、中学生や高校生のグループの相談に乗るような仕組みがあってほしい。

【会　長】

特に文化センターを念頭においたご意見という感じがあり、議題（３）でまたいただきたいお話だと思った。計画の枠組みなど、全体を考える点でご意見があればお願いする。

【委員】

多くの取組例を挙げているが、プランの冊子になった時に、この部分の分量など、イメージを説明いただきたい。

【事務局】

こちらは本編の一部になり、それより前に、体系図や、これまでの振り返りなどが載る。ただ、そちらは前回までに議論を終わらせていただいているので、今回はさらにステップを進めて、取組例とめざす姿をご確認いただいているところである。この部分の分量は、おおよそ今回の資料のとおりである。

【会　長】

さらにご意見があればお願いするがいかがか。なければ次に移る。

【会　長】

続いて、議題（１）「ウ　指標」について、事務局から説明をお願いする。

【事務局（課長）】

資料３に基づき説明

【会　長】

計画は、指標を立てて点検していくことが求められるが、難しいところもある。何かアドバイスやご意見があれば、お願いする。

私は今、他市で生涯学習施設の指定管理者選定の仕事をしている。そこでは、各講座の受講者アンケートを実施しており、分析してニーズを汲み取っている。

したがって、受講者アンケートなどの手法を使って、結果を蓄積するとよいのではないか。現在の生涯学習プランの前に少しブランクがある。したがって、データの積み重ねというのは、まだ十分ではないという状況にもある。今回提示の指標でやってみて、データを重ねていくしかないのかなと個人的には思っている。

【委員】

めざす姿があるのであれば、それにどれだけ近づけたかを測れるような指標がよい。目標１の「学びの裾野を広げる」のところであるが、めざす姿に「いつでもどこでも」と入れてしまうと、オンラインなどを想像するので、ない方がいいかと思う。めざす姿を「誰もが学ぶ楽しさに出会えています」とするのであれば、「生涯学習相談会での相談件数」よりも、講座のリストを並べて、それぞれ「知らなかった」や「とても興味があるけれど行けなかった」などの選択肢を作り、参加したら５点、参加したかったが参加しなかったら２点、知らなかったら０点と点数をつけるようなやり方はいかがか。区報に載っていても読まない人には届かないため、情報発信方法を工夫するなどに繋げられる。目標２と３の指標については、めざす姿を測定する点ではよいが、目標３の２つの指標の意味が近しいので、別の切り口で質問を考えてもよい。

【会　長】

実際の計画書の中でどこにどのように入れ込まれるのか、その点から、事務局にお考えはあるか。

【事務局】

指標について、ご指摘はまさにそのとおりである。事業を何で知ったか、その事業になぜ参加しなかったかなど、指標に載せるかどうかは検討が必要だが、アンケートでそのような内容を取っていく必要性は非常に大きい。それによって、原因を追究し、解決策を考えることは、各事業で意識していくべきことである。ただ、指標として、どこまで具体的な内容にしていくかは、考えさせていただきたい。

あと、１つ目の「いつでもどこでも」という話は、お話いただいたとおり、オンラインなどを意識したことになっている。より若い層や、日中に仕事がある方などは、オンラインなら受講ができることもある。そのため、どこでも学べるような基盤を整えていくことも生涯学習で大事だと思っている。そのような意味で「どこでも」を入れていたということを加えさせていただく。

【会　長】

他にご意見はあるか。なければ次に移る。

【会　長】

続いて、議題（２）「令和７年度取組状況報告」について、事務局から説明をお願いする。

【事務局】

資料４、５を参照いただきたい。地域で区民の学習をコーディネートするという実践であるが、文化センターでの取組を中心に報告する。文化センターは、元々、大田区青年館として発足している。区の社会教育施設は公民館という名称ではなく、青年館からスタートして現在の文化センターという社会教育施設になっている。他には、青少年交流センターや大田区総合体育館、大森スポーツセンターなど様々な社会教育施設がある。区民センターの中にも一時、社会教育施設を併設していた時代もある。現在も社会教育関係団体が多数活動しており、大田区に登録している団体だけでもおよそ 2,000 の社会教育関係団体がある。これだけでも区民の活動が盛んであることが読み取れる。そして、法的根拠を持っている博物館は学芸員を配置していたり、大田区の図書館は指定管理者制度を導入したりしているが、図書館司書資格を持った職員の配置もしている。こうした社会教育施設を運営しているほか、施設に紐づく社会教育専門職員として、社会教育主事２名と、社会教育指導員７名がいる。こちらの社会教育専門職員が、文化センターを通して地域で活動している団体、また個人も含めて、一人ひとりの学びを紡いでいるという実践について報告する。基本理念・目標に基づき、区民の生涯学習・社会教育が展開していけばという実践で

ある。社会教育指導員から説明する。

【事務局（社会教育指導員）】

資料４に基づき説明

【会　長】

続いて、議題（３）「文化センターを拠点とした生涯学習の地域展開について」について、事務局から説明をお願いする。

【事務局（課長）】

資料６に基づき説明

【会　長】

２つの論点があるが、どちらについての意見でも構わない。こういう取組が必要ではないかという具体的なものでも、日頃地域で活躍されている中で感じられていること、どんなことでも、この２つの論点に関連させながら意見をいただきたい。

【委員】

文化センターでは年に一度、文化センターまつりというものがあり、その実行委員会を立ち上げた時に、それぞれのサークルがどのように活動していて、発表のためにはどういう準備が必要かということと、活動のために困っていることなどの情報が最も集まる。そのため、各文化センターの中では、ある程度コミュニケーションが取れていると思う。ただ、普段文化センターに関わらない人たちが訪れやすい場所かというと、今までは閉鎖的な雰囲気があったと思う。ある文化センターでは、ロビーで音楽を流すなど、居心地の良い場所にすることと、なるべく外に向けて開いていこうという取組を進めてきた。石川町文化センターでは、ロビーを使って朗読会を行ったところ、関心を持って来られる方がいた。コロナ禍が過ぎたが、まつり自体を立ち上げるのは大変だということで、コーラスとダンスだけの催しを文化センターで行った。催しの実施

には、場所の確保の問題があるが、今回のプランを見ていると、今後はスムーズに行くのではないかと期待している。各サークルが練習のためにそこに来るだけではなく、そこにいる人たちがさらに色々な企画をできるような場所にしていくことが必要である。各文化センターを見ていると、ロビーが広くても、くつろげる場所が少ない。工夫して入りやすい文化センターにしてほしい。

【委員】

文化センターを含め、公共施設は利用用途が決められている。例えば美術室。以前は美術サークルが多かった時代があり、様々な施設に美術室があったが、実際はそうではないエリアもあった。そのため、美術室を「カルチャールーム」として用途を広げることで、以前は使用を禁止していたような利用ができるようになる。室場によっては、稼働率が８割、９割と高いところがある。私ども文化振興協会が指定管理者として管理している施設も、時間帯によっては、ほぼ空いていない。地域によってすごく混んでいるところと、空いているところの差が大きいのが大田区の特徴ではないか。利用しようと思っても部屋がいっぱいというところがあるので、これまで使用を禁止していた用途を見直すとか、あるいは学校も一部活用するなど、横断的な取組がないと新しい方が活動をするのは難しい。文化センターは利用を制限しすぎると入りづらくなる。ある意味、既得権益化していて、新しい方が入れない仕組みになっているという声も聞く。実情を踏まえて、そこをどうクリアするのかという実務的な議論をしていかないと、うまくいかない。もう一つは、建物には専有エリアと共用エリアがあり、先ほどロビーの話が出たが、非常に難しい。ロビーで音を出したり、コンサートをするのが日常的に行われたりすればよいと思うが、人によっては「部屋に音が聞こえることで自分たちの活動ができない」という意見になる。緩和して広げていこうと思っても、一方で反対の意見が出てくると、できなくなってしまう。職員の覚悟というものも非常に問われてくる。属人化しない形にするためにこのプランがあるのだと思う。プランに当てはめて、緩和するとともに区民の学びがより深められるような仕組みができるとよいのではないか。

【会　長】

実務的な観点から非常に重要な指摘をいただいた。ロビーも重要だと思うが、それぞれの部屋の用途の制限はそれほど強いものなのか。

【事務局】

用途の制限についてであるが、音出しについては、音出しができる・できないという決まりがある。防音設備になっていないところが多くある。また、環境によっても事情が異なり、住宅街に面しているところであれば、配慮が必要である。ただ、共通して思ったことが２つある。１つは、さきほど職員の覚悟という話があったが、ロビーを自由使用にすると、収拾がつかなくなる懸念がある。そこはルールを作ることが必要。11 館を回ってみてよい点と課題が見えているので、今は職員の覚悟も含めて、今のルールの中でできることを考えていかなければいけない。諸室の用途の制限については、一定程度存在するが、用途を超えた使用も試している。具体例としては調理室。草木染めの実践報告があったが、美原文化センターでは調理室で水が使えるので、その水を使って作業をしている。衛生面は管理した上で新しい取組を行っている。もう一つの具体例としては、今年改修した馬込文化センターの調理室である。調理の機能は残しているが、ステンレスの台は取り払い、一般的な机と椅子にして、キッズスペースのような雰囲気にした。スクリーンとプロジェクターを置いたところ、ワールドカップの時などに、若い人たちが集まって調理しながらスクリーンで試合を観て食べるということがあった。これは、これまでの理科室のような状態だったら無かった話である。和室についても、「正座が大変だ」という意見が出ており、糀谷と萩中については、置き畳や椅子や机も設置できる床に改修した。今年度も色々と試している。

【会　長】

私も、色々な自治体に行って調理室を見せていただくが、非常に多様化していると思う。

【委員】

以前、大田文化の森に関わっていたことがある。その時、幼稚園や学校に声掛けをして、ロビーに作品を展示した。学校や幼稚園との関わりもでき、何よりも保護者や祖父母、兄弟が見に来ることを楽しみにされる。今まで来たことない人へのアプローチにもなる。そういう好事例もあるので、参考にしていただきたい。

【委員】

文化センターの利用者層は 60 代、70 代が中心と聞いている。元々が「青年館」ということで、集団就職の時代に孤独な若者たちの居場所づくりから始まったことだと思うが、その年代がそのまま残っている感じもする。今後の課題は「若返り」であり、青少年の人たちに使ってもらうにはどうしたらよいかを真剣に考えていかないと、どんどん若い人が入りにくい施設になっていってしまう。若い子たちが地域クラブなどを探そうと思ったら、まず必ずネットを検索する。区は「おおたまなびの森」というサイトで色々なものを紹介しているが、そのサイトが非常に検索しづらい。また、ボランティアの募集に関しては、「まなびの森」でもコーナーがあるが、社会福祉協議会でもボランティアの紹介をしている。このように、大田区でも色々な団体が色々な情報を発信してしまっていて、検索するのが大変である。違うサイトから入っても同じ情報にたどり着けるような仕組みが必要である。イベントに関しても統一が取れていない。機能についても、例えば音楽ができる場所を「うぐいすネット」を使って調べても非常に分かりにくいのが問題である。これでは、お年寄りばかりが集まってくる施設になってしまうのではないか。

【委員】

お年寄りが集まってくるというよりも、「青年館」を使っていた時代の人たちがそのままお年寄りになったのだと思う。お年寄りたちは、若い人がくることを願っているが、自分ではなかなか引っ張ってこられないことが悩みである。

【会　長】

若者が来ない理由を当事者で考えてもなかなか難しいので、やはりコーディネーター（社会教育指導員など）が関わって、ネットの作り方を含めて、きっかけづくりのアイデアを出す必要性がある。

【委員】

居場所について、どんなに素晴らしい空間であっても、行っても閉まっているのでは居場所にならないので、利用できる時間帯をもっと広げていただきたい。加えて、もう少し興味関心を引く面白い講座を設定してほしい。これまでも ICT を活用した講座は数多くあるが、例えば AI 活用術のような講座があるとよい。読書会をするという方法もある。読書会は１つの本を読んで参加している人たちが自分の意見を言い合うもので、自然と交流にも繋がる。今の状態では、少なくとも私の世代にとっては居場所となるにはまだ魅力が不足しているのではないかと感じる。色々な世代の興味関心を揃えることも一つの居場所になり得ると思う。

【会　長】

曜日や時間帯は重要である。高齢者の都合がよい時間帯は現役世代にとっては悪い場合もあるが、妥協の余地はあるので、工夫して設定する必要がある。

【委員】

「文化センターまつり」では、１年間練習してきたものを発表するが、レベルがかなり高い。聞いて驚いたのは、文化センターでも高齢化が進んでいるということである。自治会・町会で苦労するのは、メンバーを増やすということだが、難しいのではないかと最近思っている。資料４の最後に「ほとんどの家族が初めて文化センターに来られました」とあったが、これが一番大事なことである。新しい人にいかに PR していくか、理解してもらうか。そのような観点から取組を続けるのが一番よい。今のメンバーを増やすのではなく、新しい世代で新しいサークルを作ったらもっと来やすくなる。今のメンバーを増やすという形ではなく、新しいグループを作っていければよいと感じた。

【会　長】

私が関わったアンケートでも、生涯学習団体の高齢化と、次世代への承継に対する不安がここ 20 年間でかなり増えた。生涯学習グループの場合は、新しいグループを作るということも十分にできる。その設立にあたっては、社会教育指導員がサポートをしてくれるのではないか。

【委員】

社会福祉協議会では、ボランティアを行ったり、地域の人と接したりする中で、「居場所」というのが非常にニーズとして高く、求められていると感じている。今日の資料を見ると、向かうルートは違うが、かなり「地域福祉コーディネーター」と似たことをされている。

社会福祉協議会側で掴んでいるニーズと、生涯学習で計画しているものを上手く組み合わせた新しいものを作っていくというところに大いに可能性を感じている。資料の中にも「アウトリーチ」「参加支援」「地域づくり」とあったが、これはまさに重層的支援体制整備事業の、社会福祉協議会が受託している事業そのものであるため、その辺りを上手く組み合わせていくことが必要だと感じた。

【会　長】

特に、重層的支援の「地域福祉コーディネーター」は、個別相談が非常に多くて、地域づくりどころではないという状況も別自治体では聞いている。地域づくりにすでに先行的に取り組んでいる大田区の場合は、社会教育指導員と連携をして、一緒に地域づくりをしていくというのは、非常に重要な視点である。

【委員】

文化センターは、近く行きやすいということが良さである。そういったところをうまく活用すること、発想の転換と機能の強化が必要である。ホームページの話があったが、デジタル（バーチャル、オンデマンド、オンラインなど）をうまく活用できるとよい。中学校では部活動の地域展開という話があり、文

化センターがそうした子どもたちの活動の場になるとかなり身近な場所になる。また、防災は、地域との関わりという点で大事なテーマである。さらに、発想の転換で言うと、何月何日にこれがありますからどうですか、というのは昔の考え方である。これからは、多様な他者と協働して自らの人生を舵取りしていくことが求められる。そのため、今の人は、自分の時間にあった時にやりたいことをやるというのが多い。発想を転換し、若い人に任せていくということも大事である。今までのものがとてもよくて、それをどうやって維持するかという考え方が多いので、その辺を転換していくアイデアを出していけるとよい。

【委員】

学びを通して、いろんな人と関わるのであれば、世代も幅広くないと厳しい。ただ、若い人が若い人で固まっても意味がないし、高齢者が高齢者で固まっても意味がない。既存の文化センターのハード、ソフトの部分をドラスティックに変えていかないと、拠点としての機能は難しい。ただの場の提供であれば今と変わらない。文化センター自体は古い建物が多い。こどもや若者が活躍する地域の拠点とするためには、抜本的に変えていく必要がある。居場所の考え方も世代で感覚的に異なっている。課題を整理していくことが大事。文化センターを使うよさと大変さが両方あると思う。

【委員】

文化センターに行ったことがない、知らないという方が多い。親子を対象としたイベントなどを企画し、まずはこどもたちに参加してもらって、知ってもらうことが文化センターに関わるきっかけになる。そのような場を作ることを支援する仕組み作りができれば、よりそういった場が生まれてくる。

【委員】

今日のお話を伺って思ったのは、メンバーシップをあまり強く求められないというのも大事なことなのではないか。「入ったら取り込まれてしまうぞ」ではなく、ちょっとした気持ちで出たり入ったりしやすいことが保証されるのが、新しい人と出会うためにはとても大事なことである。図書館は自由に出入りが

できる。文化センターもそうした形で、出入りしながら、何かやったら面白いのではないかと面白さに気づいていくという順序が大事である。始めることは楽しい、新しいことに出会うとワクワクするということを強調することが大事である。

【副会長】

居場所について、働いている人には拘束が強い講座よりも、まず体験できる、短い時間で体験できるようなロビーでの活動があるとよい。ロビーを居場所にするということは、とどまらないとできない。占拠かたまり場か、その辺のバランス感はすごく大事で難しい。また、自然とたまれる喫茶コーナーや、自習のニーズは高いため、自習をきっかけにできないか。あるいは、学校に行きづらい人、会社に行きたくない人がちょっと集まって喋れる、仲間を見つけるような、堅苦しくない語り場があるとよい。また、運営や企画に若い人に関わってもらうため、職業体験に来た中学生に企画を立ててもらうとか、実習に来た学生に企画を立ててもらうなどしてうまく絡められないか。

【会　長】

多くの委員が、かなり大きな飛躍というか、抜本的な変革を望んでいると感じた。ぜひ事務局はそういう声を受け止めて、10 月には充実した素案が出てくることを期待している。

5　閉会

【事務局】

多くの意見をいただき感謝申し上げる。まとめとして所感を３つだけお話しする。

１つ目は、ふらっと立ち寄れる、誰もが入れるような仕掛けである。ロビーを軸に考えていきたい。２つ目は連携である。社会福祉協議会などと多様な連携をする中で進めていきたい。３つ目は多様なニーズである。実は文化センターで AI をテーマとした講座も行っている。改めて、時代を捉えるのが大事だと感じた。また情報発信。大田区公式 LINE の活用で、講座の申込者が増えた

という効果も出ているので、情報ツールとの連携や相互リンクの活用も行っていく。

文化センター11 館を所管する中で課題も見えてきたが、文化センターのよさを実感してもらえるように運用して参りたい。

次回、第６回推進会議は 10 月 20 日（火）、午後１時半から、区役所を予定している。また、追加の意見等があれば、９月１日までに意見書にてお送りいただきたい。

それでは、以上をもって閉会とする。

■追加のご意見

・図書館で活動されている「おはなし会」を文化センターの催しに引き込むとよい。
・目標１の目指す姿中、「いつでもどこでも」は、そのまま残しておいた方がよい。